

中国華南地方における飛山信仰の再検討

——日本の氏神論を参照して——

黄

潔

1. はじめに

本論文は、中国華南地方の一部で広く祀られている「飛山」という民間神の様相について検討するものである。具体的には、従来楊氏一族の祖先神で、主に「楊再思」と呼ばれる漢族の歴史的人物に関連するものとして論じられてきた「飛山」を、日本で蓄積のある氏神信仰に関する民俗学的議論から再検討する。

飛山という呼称は、靖州城西の飛山という山名から由来するという説と、歴史上、かつて湖南省靖州一帯は「飛山蛮」という華南少数民族の末端の地域単位が支配していた中心であったからである、という説がある¹⁾。どちらが正しいかは判別が困難だが、実は明清時代以降、楊再思が神主として祀られる飛山宮や飛山廟は、靖州を中心に湖南・貴州・広西の隣接地域に広く分布していた。地元民は飛山公（「飛山太公」または「飛山令公」などの別称がある）を楊再思という祖先とし、また地域ごとによって、飛山公という神を祀る廟を「飛山廟」、「飛山宮」、「飛山神祠」などと呼称してきた。飛山公楊再思とは、歴史上、トン族の有名な地方首領・頭人であり、また、渠水の中流に位置する靖州（古代の誠州、十洞地区の所在地）と深く関連するとよく言われてきた²⁾。そして、1980年代以降、西南中国に暮らしているトン族の人々は民族エリートが収集してきた楊氏の墓誌や系譜などの資料を手掛かりにして祖先祭祀の儀礼を行い、それを通して、飛山公が楊再思であり靖州を中心に周辺各地に住む楊氏の祖先であることを主張するという動きもみられた。

従来の研究では、歴史文献と民間伝承に基づいて、飛山（または「飛山公」）とされる楊再思が唐末五代時期の少数民族の首領であり、宋代から神として祀られ始めたが、清代にはすでに西南各地の楊氏一族の祖先神と守護神となり、特に祖廟とされたものが多く、公的祭祀儀礼としても取り入れられたことが論じられてきた [e.g. 石啓貴1986: 433, 田2015: 166, 203–204, Paul 2021: 75]。トン族の民間社会では、「飛山公」に関する地方史の内容（すなわち楊再思の子孫であるという言い伝え）を借り、親族集団の血統と分節を認定している。またそれを「信じられる歴史」の知識とするため、新しい伝説や楊再思の遺跡が作られてきた。これらの現象は、実は楊再思との関係は希薄であると指摘されている [張応強2010: 117–121, Zhang 2013: 66–85]。トン族地区では、湖南靖州の飛山宮が「飛山総廟」と認められているため、一

(1)

年に2回廟会を行う。また各地のトン村の中に飛山廟や飛山宮が建てられることが多い。各地のトン族の楊姓の多くは、自分を楊再思の子孫と自称していることもよくある〔謝2009: 77-85〕。また、湖南省靖州県政協文史委員会が2013年11月13日に公表した「飛山文化百県調査」という調査データによると、現在、湖南・広西・貴州・湖北・重慶・四川・雲南という7省区の102縣市（区）において、飛山公が祀られる神廟は563カ所ある³⁾。飛山信仰はこれらの地域社会において重要な影響力を持っており、トン族やミャオ族だけでなく、周辺のヤオ族・土家族・一部の漢民族なども飛山神を信仰している⁴⁾。これらの飛山廟は、靖州飛山宮のように歴代王朝の地方政府により建てられたものもあり、楊氏一族が建てたものもあったと言われている。

ただし、それらの研究では、飛山と楊再思との関係性が十分に解明されていない。筆者が広西チワン族自治区と湖南省の隣接地域に位置するトン族の集落で行った調査の結果によると、楊氏の一族だけでなく、呉氏・謝氏・韋氏・于氏・向氏・石氏など、楊氏以外のトン族の人々も飛山廟を建てて飛山公を祀ることが少なくない。現地の人々は、飛山を一族の祖先神と見なしたり、村全体の守護神と見なしたりする。そのため、村落社会の中には飛山廟が一つだけあったり、飛山廟が複数存在したりすることがしばしばみられる。したがって、トン族村で調査を行う時、飛山廟について、しばしば次のような疑問にぶつかる。この飛山廟で祀られているのは、祖先神なのか？ 守護神なのか？ 土地神なのか？ 多くの場合は、住民の間でも諸説紛々としており、定義できない状況にあった。

これは、日本の氏神に関する民俗研究での知見と相似点が多い。柳田国男が『先祖の話』で言及した先祖が神へとなるメカニズムによると、人が亡くなると、通例は33年忌を経て、たましいは先祖となり、個々の祖霊の個性を棄てて先祖として融合することが氏神の基底であったが、現在日本各地の村落で祀られる氏神は、本来のものではなく、「村氏神」「屋敷氏神」「一門氏神」の三つのタイプがみられるようになった。そのうち、特定の家に所属する者あるいは一定の地域内に住む者は全部、氏子としてその祭りを営む村氏神は最も一般的な氏神の形態であり、それが中世あたりから次第に混同が進み、長い歴史の中で大きくまた多様な変化があった〔柳田1969(1946): 142-144〕。現在見られる氏神は、①氏族の祖神、②氏族の守護神、③氏族が本貫地で祀る神（産土神に相当する）、という三つの例がある。地域ごとに祀られている氏神は、かつて氏族が共同で祭祀した祖霊であり、その一門に関係の深い神であった。また、氏神に類似する性格をもつのは、鎮守という荘園など特定の建物や特定の土地・地域の守り神であり、産土神という生まれた頃から人の一生を守る土地（本貫地）の神であった。したがって、日本の神社と神々の特徴は、一柱だけが単独で祀られることはなく、神祇信仰・陰陽五行や道教の思想・仏教信仰の三本混じりという、中世世界の複雑怪奇な動態にある〔新谷2017: 239-243〕。もちろん飛山は氏神と大きく異なるところもあるが、本論文は飛山神の氏神に類似する性格をもつ点に着目し、日本民俗学の方法論とくに氏神研究の蓄積を応用し、中国

南部少数民族の土地神を新たな視点で捉え直すことを試みる。

2. 飛山公とは、楊再思とは

まず飛山公楊再思と飛山神廟の建立の歴史について述べる。

現在把握できる状況によると、各種の歴史文献の中で飛山公楊再思の事績に関する記述はかなり限られている。おおよそ明確であるのは次のとおりである。楊再思は、唐末五代の歴史的人物であり、「叙州蛮」の一部である「飛山蛮」（或いは誠州、徽州蛮ともいう）の酋長（首領）である。文献資料の中に多くの記録が残されているのは、楊再思の子嗣や末裔の活動とされている。先行研究は新旧『唐書』、『宋史』、『宋会要集輯稿』、『資治通鑑長編』、『讀史方輿紀要』、『十国春秋』及び新旧『五代史』などの史書⁵⁾に基づいて、楊再思とその子孫の活動と歴史を整理・検討し、次のようなことを明らかにしている。

唐末五代初頃、叙州蛮の酋長である潘全盛（或いは潘金盛）の拠点は現在の湖南西南部と貴州黔东南州の隣接地区であった。後梁の開平5年（911年）に潘全盛は同じ党派の楊承磊を派遣し武岡を侵略した。楚王馬殷は呂師周を派遣し、軍隊を率いて討伐した。その後、呂氏は楊承磊を捕まえて殺し、潘全盛を生け捕りにして斬った。楊再思が歴史の舞台に初めて登場したのは、楊承磊が「族人」として現れ、飛山洞が呂師周によって平定された後で、楊再思は楚王馬殷に帰順した⁶⁾。その後、楊再思は潘全盛と楊承磊の後を継いで「十洞」の地方酋長（首領）になった。40余年後、楚王の馬氏の勢力が衰えた後、楊正岩（楊再思の息子）は「十洞首領」と称し、また「徽、誠二州の刺史」と自称した。宋代以降、太平興国4年（979年）から、誠州、徽州一帯の各州・洞（少数民族の末端の地域単位）を支配していたのは主に楊氏首領であったこと、楊氏首領が朝廷に内附（依附）や入貢したことは、史書に頻繁に記されることによって明らかになっている。これらの楊氏首領は、宋初の羈縻政策⁷⁾の下にいる地方の実質的な支配者であったが、史料では彼らは「楊氏」という族姓によって記されていた。彼らが楊再思の子孫かどうかは明確でない。羈縻政策は神宗の代まで維持されていたが、熙寧9年（1076年）徽州が再度朝廷の直接統治下におかれることになった後、誠徽州蛮酋と呼ばれる楊氏の首領はまた「23の州・洞を朝廷に帰附することで、靖州が設置された（楊氏以二十三州洞帰附、因置靖州）」後も、徽宗崇寧2年（1103年）に「楊晟臻などの楊氏首領が朝廷に土地を上納することで、靖州は再び改置された（楊晟臻等納土、次改置靖州）」〔顧祖禹2005: 40〕とあるように、靖州は地方行政単位として定着した。

上記の楊再思とその族姓が靖州飛山を中心とする溪洞地方で生活を営んできた過程において、次の二点およびそれに関連する事件は特に注目すべきである。一つは、中央王朝にとって、楊氏は少数民族地方社会の体表者となったということである。具体的には、唐末五代初、潘全盛・楊承磊と同じく溪洞蛮酋を務めていた楊再思は、（圧倒的な勢力をもった）馬楚政權

に妥協しなければならないため、楚国に帰順した。それは馬楚政権と対抗してきた過程でとった積極的な策略であり、それによって生存空間を得ながら、楊氏の溪洞における地位をさらに固めた。しかし、後代に伝わる飛山公楊再思に関する歴史の語りでは、楊再思の帰順が彼の能動的選択であり、彼の主体性が地元住民の戦乱からの解放と生存に貢献していたことを強調する。もう一つは、宋代以降、中央王朝は地方社会に権力を浸透させるため、楊再思を地方の守護神として創出したということである。宋代から、楊氏一族の地方における権威が認められ、王朝も次第に溪洞地方に対する支配を強化することができた。その後、清代光緒年間(1875-1908年)の『黎平府志』などの地方文献に記されているように、楊再思は北宋神宗・元豊年間(1078-1085年)に「威遠侯」、南宋理宗・淳熙年間(1174-1189年)にはさらに「英惠侯」などの封号を授けた。それは中央王朝による地方社会を統合するための巧妙な手段として知られている。

現在、民間社会では、朝廷による封号の授与、民衆の祭祀、楊氏の子孫による系譜などの伝承があり、特に「楊再思氏族通志」などの楊氏族譜のような民間文書では、楊再思は「亡くなった後、朝廷により2回「王」に追封され、2回「公」に追封され、3回「侯」に追封された(逝世後兩次封王, 兩次封公, 五次封侯)」[『楊再思氏族通志』編写組2002: 31-41]と伝えられていたが、すべてを史実としてとらえてはいけぬ。ただし、「威遠侯」などの中央王朝による飛山公に対する追封は、その後、明清時代から現在にかけて、湖南と貴州の境界地帯の町や村に至るまで伝播してきた飛山宮・飛山廟で祀られている飛山神の称号とされている。例えば、「飛山土主威遠侯王」「威遠將軍」などがある。それでは、楊再思という歴史的人物は現在の中国華南少数民族が祀っている飛山信仰とどのような関係があるのか。次に、飛山廟の原型とその伝播の歴史から検討する。

3. 飛山廟の原型とその伝播

(1) 総廟と言われる靖州の飛山神廟

では、飛山公楊再思はいつから神霊として祀られるようになったのか⁸⁾。調査可能な文献資料から見れば、靖州飛山宮(現在言われる飛山総廟⁹⁾)に関して最も早く記録された地方文献は、明代嘉靖期に重刻された石碑碑文「重刻飛山神祠碑記」である¹⁰⁾。碑文は次のとおりである。

飛山之神、自有靖州以来、已著靈迹。元豊六年賜廟顯靈，三十年，封威遠侯。按志，宋淳祐間，已加為英惠公；此祀作于前，故只称侯。特為表之，血食此土，福庇一方，于今八十余年。歲時水旱，祈求驗如影響。正廟在飛山絕頂，一州之民凡有禱祀，皆登陟于高峰之上。旧有行祠建于刀弩宮前。紹興二十五年，崔守移置于方広寺門之左；乾道六年，詹守復移置于寺

側之西，然皆一時草創。淳熙三年，來盛中洞姚民教作過，朝廷調發江陵駐紮統制率逢源提兵收捕，密禱于神，既與賊戰，覺空中飛沙飄石，奔風急雨，賊皆股慄，望風而退，由此獲捷。率乃答神之貽，增修行祠，易以竹瓦，添置泊水，覆以茆茨。日月逾邁，風雨飄飄，上漏下濕，神像幾暴露矣。九年正月，淦陽孫公國伝來守是邦，下車之初，百廢具舉，始修學宮，備器械，整官舍，至于倉庫場務犴獄之屬，修葺一百余間，悉覆以瓦，其勤可謂至矣。公嘗語于衆曰：“備員于茲，雨陽時若，年谷屢豐，賴神之力量居多。茲及瓜(?)不遠，而神祠弊漏如此，儻不能有以報之，是誰之責？”乃出已俸，鳩工市材，取新去故，易小以大，重建殿堂泊水，增置廚房一間，易茆以瓦，□之以墻，塗以丹雘，匪雕匪□，不侈不陋，尺椽片瓦，不擾于民，廟貌尊嚴，棟宇輪奐，締始于次年□□之朔，告成于冬季既望，乃拳酌而祀之日：

飛山之神，功德兼隆，福庇一州，廟食侯封，八十餘年，遠近欽崇。自惟不才，符分虎銅，二年于茲，自春徂冬，所祈必應，有感必通，雨陽應候，時和歲農，民安盜息，皆神之功。何以論報，第竭恪恭，修神之祠，興國無穹！

祀事既畢，連日弄晴，鳥鵲噪野，瑞氣郁蒸，若神之降格焉。噫！以公之莅官，行已正直，不欺此心，默有合于神者，故依人而行也。太守公家世磁州，名顯祖，字昭卿，妙齡以武拳魁天下，命為修武郎，閣門祗□，知延安府，極有政治。淳熙甲辰上元日，迪功郎靖州錄事參軍兼司法福唐謝繇記。（奉敕守靖州等處地方右參將清平金章重刻，時嘉靖丁酉夏五月谷旦）

碑文の内容によると、飛山公楊再思を「威遠侯」と追封したのは、宋代元豊6年（1083年）に「賜廟」（廟を賜る）して神として祀った後の元豊30年で、淳熙甲辰（1184年）から80余年をさかのぼった、北宋の哲宗末年（1100年）から徽宗大觀初年（1107年）までの間、つまり1110年前後であった。碑文の追記にみると、神祠は南宋の紹興年間と乾道年間に二回移転しており、いずれも飛山（山名）の山頂にある方広寺の付近であった。注意すべきなのは、移動したのは「行祠」（臨時的に建てられた廟）であって、「飛山絶頂」の「正廟」（本社や本宮）ではない。しかし、1155年、「刀弩營」（地名）の前の「行祠」は地元の官僚によって方広寺の左側に移され、1170年には後任の官吏によって方広寺の西側に移された。それらの記述によれば、飛山の山頂の神祠はもともと一時の簡易的なものであったが、1176年に楊再思が王朝軍士の前でその神力を現し、軍士は彼の加護を得たため、蜂起を鎮圧することができた。その後、正式な神祠が建てられ、飛山公楊再思の影響力が深くなってきた。その後、1182年、新たに着任した官吏が書院と飛山神祠を建造・修繕した。それらの公式的な行為により、飛山神祠は記念物としての価値を高めてきた。

もう一つの石碑碑文は、明代・靖州参将金章が重刻した明代・国子監倪鎮『重修飛山神祠碑記』である¹¹⁾。碑文は次のとおりである。

按礼，有功勤民御災捍患者祀之，不然為淫祠也。吾郡之飛山神，生以威德服溪峒苗夷，而

民受其福終則精爽不昧，民立祠以祀，凡水旱災厲，有禱克応，雖深山窮谷中，莫不有廟。事皆載古志及謝繇碑文中，是謂有功勤民捍災御患者非坎？正德戊辰，前參戎麥軒黃公慨其朽壞，為增修之。越嘉靖丙申，實今清平雲崖金公分守之。明年，一夜夢神素服白馬，相謁問其姓，答曰木姓也。及謁廟，宛如所夢。因悟楊從木從易，是為神姓，見其傾圮，捐俸修之，益石坊于祠門內，扁以封額。工訖，神事迹无所於考，訪之民間，得古志馬（焉？），并載謝繇文，從而嘆曰：“文獻若此，碑乃淪沒，非缺典乎？”為磨石而重刻之。至是，命董工百戶王松者來謂予曰：請一言以識之。予曰：“天下之事，莫不有數，莫不有時，亦莫不待人而行。神之祠建于有宋，中間遷徙修飾不知凡幾，安知公之後無繼之者乎？故曰有數與時，待人而後行也。”是為記。

（皇明嘉靖十六年歲次丁酉夏五月吉日立石）

この碑文の内容を簡単に言えば、以下のようなになる。ある夜、夢の中に、一匹の白馬に乗った白地の衣服を着た神明が現れ、その神明の前にお辞儀をして名字を聞いたところ、「木」と答えた。その後、神廟を訪ねたところ、夢で見たのと同じだと分かった。そこで、「楊、從木、從易」と悟って、楊はその神の姓であることを知った。そのため、飛山神廟が倒れていた際、修繕や改築のための寄付を行った。工事が終わった後、祠の中に本石碑を立てた際、楊再思神の事績に関する歴史記事は少ないため、民間の伝承を捜し求めて、上述の記録となった¹²⁾。

「遊飛山記」¹³⁾という明代の紀行文から推測すると、それらの飛山山頂にある飛山神廟や行祠などは、宋代から明万暦年間までの数百年の間に、おそらく戦乱などの理由によって、廃止され破壊された。その後、方広寺の左側に新たに建てられた飛山神祠の建造や、神廟に関わる修繕や建造が、歴史に再び載るのは明代後半となった¹⁴⁾。それは楊氏一族の地域社会における勢力の変化と関連している。元代の史籍によると、当地には呉氏と丁氏の2つの勢力のある氏族がおり、呉氏・丁氏の族人は少数民族の蜂起の首領を務めていた¹⁵⁾。一方、清代には、地元住民だけでなく、地方官僚も飛山公の生誕と命日に、飛山神廟にて楊再思を祀っていたことが記されている¹⁶⁾。飛山神廟は1648年に崩壊したが、同年に再建された。19世紀後半には、飛山神廟が再びその町（城鎮）を守る神力を示したため、1868年に貴州巡撫が朝廷に奏上し、飛山神廟を国家祀典に列するものとした¹⁷⁾。これによって、飛山神廟は正式に王朝の祭典に組み入れられ、飛山公楊再思は国家公認の神霊となった。

清代の地方志によると、楊氏一族は、宋代初期に地方を支配する主要な勢力となり、その後、歴代の楊氏の首領は宋王朝に「修貢」することを通じて誠州、徽州刺史などの官職を得て、長い間地方の権威として重要な役目を果たしてきた。それと同時に、歴代王朝は十洞地域統合を進める中で、楊氏一族の勢力を抑圧し続けていた。その一方、漢民族の朝廷官僚は効果的に地方を管理するため、楊氏のような地方の勢力を名目的には尊重する必要があった。したがって、官僚は、楊氏と関わった飛山神祠をめぐる祭祀儀礼を地方の公式儀礼に編入し、ひとつのシンボルとした。また、地方官吏は、飛山廟の修築・建造などを行う際、碑文などの地方

文書を作成していたことがしばしばみられる¹⁸⁾。

以上では、靖州の飛山神廟の形成とその変容の歴史を簡単に整理した。飛山神祠の建造とその後の修築や廃止など、限られた文献の記載によると、宋代以降、楊再思を記念するための靖州飛山神廟を建造してきたこと、またその後、地方官僚が飛山公をめぐる祭祀儀礼を公式な儀礼としてきたことは、楊氏一族の靖州及びその周辺の少数民族地区における声望の高さを表している。一方、明末清初の地域開発に伴い、飛山公信仰は地方の特徴をもつ神として、貴州・湖南の境界地帯で広く伝播されてきた。

(2) 祖先神となった飛山公

飛山公が民間信仰として流布し、特に楊氏一族の祖先と結びつくようになった重要な契機は、清代・道光年間（1821-1850年）の湖南提督の楊芳という人物であった。民国『銅仁府志』（巻十一列伝）によると、楊芳は、貴州の銅仁に生まれ、輝かしい戦功により出世した。幼少期に故郷を離れた楊芳は、1808年に帰省し、1811年に実家で母の世話をした。1825年、楊芳は湖南提督として靖州に滞在していた期間、飛山神廟を見学し対聯を書いた。また彼は「楊再思第三十一世孫」と自称し、靖州飛山宮に「原本于此」という横額を書いた。その後、1842年に年老いて退職し郷里に帰った。楊芳と飛山公については、1879年に靖州から離れた貴州の黎平府（佳所の長嶺崗）に位置する飛山公の墓の墓表に記されている。この墓表（「宋追封英惠侯唐末誠州刺史楊公墓表」という）は、1825年、楊芳の第三十三代孫楊恩桓が墓参りに黎平に来た時に書いたものであり、乾隆年間（1736-1795年）に銅仁府松桃庁で起こった飛山神明の靈驗記について述べている〔『楊再思氏族通志』編写組2002: 31-41〕。

墓表の内容はすべてが史実とは限らない¹⁹⁾が、重要なのは飛山神が靖州地域を守ったという語り朝に朝廷に認められ、牌匾を受け、ある程度の正統性をもってきたことである。それが、後世の人々が飛山神の由来と楊再思の事跡をつなげてきた一つの重要な要因であった。

楊芳は、楊再思の事績を自分の家柄とつながりがあるもので、楊再思が自身の偉大な祖先であると述べていた。墓表では、楊再思「奉唐正朔，保障滇黔（唐代に正朔を奉じ、雲南・貴州を防衛する）」および「生子十二，受土分鎮滇黔（十二子を産んで、雲南・貴州において土地を分け鎮守する）」とある。これは、後に更に多くの楊氏の末裔たちが楊再思という先祖の源へとさかのぼることに重要な「根拠」を提供した。例えば、胡長新（1818年-1884年、清朝貴州省銅仁府儒学教授、地方官員）が考えているように、楊芳は当時の地方官僚であり信用できること、当時の地方宏儒鄭頭鶴・鄭珍も更に実証を行ったため、飛山廟が構築した楊再思の正統性に基づいて、楊再思の祖先としての合理性と信頼性も強化された。その後、楊芳が述べた楊再思に関する歴史の語りは、湖南と貴州の隣接地域の官吏と民衆の間に広く伝播されてきた。1879年の靖州地方誌²⁰⁾には楊再思の墓所について記されており、威遠侯楊再思の墓は、城西45里離れた下郷村にあると記されている。1908年に胡長新が書いた祭文も楊再思の墓は黎平府

にあることに言及している。それ以後の記録は、墓地の歴史ではなく楊再思に対する祭祀活動に注目している。明清時代から現在にかけて、各地に伝承されてきた飛山神の物語は楊芳のテキストの模本に基づいており、この地域に住んでいる楊氏の人たちは飛山公を系譜上の祖先とし、清明節の際に飛山公楊再思に対して祖先祭祀を行ってきた。

(3) 各地で展開される飛山廟と飛山信仰

清代の地方文献には、飛山廟とその民間信仰活動に関する記述が多くみられる。特に、湖南と貴州の隣接地域では、各県のほとんどの地方文献は境内の飛山廟の状況を記載している。これらの神廟の呼称は、飛山廟や威遠侯廟や飛山宮などやや違いがあるが、祀られる神は同じく飛山太公楊再思である（表1と図1参照）。そのうち、一部の神殿は靖州地域からの移民によって建てられ、地方の守護神と見なされている。総じていえば、清代中期以降、祖先神や地方の守護神としての飛山公信仰は、靖州を中心としてその周辺地域へと広がってきた。

では、なぜ飛山信仰が広く流行したのか。次に各地の事例から考察してみる。具体的には、前述した中国西南各地に見られる飛山信仰の特徴を明らかにするため、「比較をしないことを前提に、各地の民俗をしっかりと把握し、地域に即して考察する」[福田2016]。

今日まで湖南省と貴州省の境界地帯に伝えられてきた民間伝説には、楊再思や飛山神明の正統性が構築されてきた影響が見られる。靖州地区に伝わっている「楊令公破飛山寨」という伝説の大意は、次の通りである。

靖州の飛山寨（地名）は「潘老虎」（潘全盛をさす）という「蛮王」が占拠している。彼は天書と宝刀だけではなく、3000の烏鴉兵と99の虎をもっている。彼は、一地方を制覇し、悪事の限りを尽くした。最も恐ろしいのは、この「蛮王」は人肉を食べたり、宴会で人肉を食べさせたりする嗜好があった。したがって、飛山の山麓に住む民衆は安生できず、あっちこちに避難していた。「飛山令公」楊再思はこのことを聞いた後、民衆を救けるために、妙案を思いついた。まず、彼はなんとか飛山寨に入り、「潘老虎」の善良な母の同情を得て、叔父として「潘老虎」と会い、天書と宝刀を見た。また「潘老虎」に一杯飲ませた際に、犬の血を使って天書の法力を破り、宝刀鞘に生漆を注ぎ込んだ。翌日、楊令公は12部将を率いて、兵馬を揃えて、飛山寨を包囲し討伐した。「潘老虎」の天書の神力が失われ、烏鴉兵と虎将も使えず、宝刀も鞘から抜けなくなった。そこで、楊令公は「潘老虎」を捕まえて、飛山寨の悪人を消滅させた。かつて「潘老虎」の暴威にさらされた民衆は飛山に戻り、楊令公を飛山峒主に推挙した。その後、地元の人々は令公の功德を記念するため、飛山神廟を建てて永く祀ってきた²¹⁾。

この語りによると、歴史上、潘全盛の部下である楊承磊一族の成員であった楊再思は、潘全

表1 明清時代の貴州と湖南の境界地帯における飛山廟の分布

所在地	呼称	神名	引文	出典
靖州	威遠侯廟	楊再思	威遠侯廟，在州城西，侯名再思，誠州刺史，楊氏之祖，宋紹興間，封威遠侯，立廟祀之，淳熙間，加号英濟，后廟毀，本朝正統十一年，重建飛山廟有二，一在綏寧渠治西，一在通道泉東。	明・李賢『明一統志』卷66
	渠陽廟	楊再思	渠陽廟，在江東，祀楊再思旧廟。楊公廟，祀青木楊公水神，一在土橋，一在灘上，一在渠河東文家溪口。飛山廟、元帝廟、晏公廟，俱在城内。	清康熙・祝鐘賢『靖州志』卷3
	飛山廟	楊再思	飛山廟，城西開外作新書院左，祀宋誠州刺史楊通宝之祖再思者，嘗有功於郡，宋紹興二十年封威遠侯，淳熙十五年号英濟侯，嘉定十年加广惠侯，淳祐九年仍加英惠侯，正統十年郡守蘇恣重建，正德戊辰年參將黃公濤豎石坊於廟前，歲時旱潦及疫，厲禱之輒應，每六月初六日侯生辰，十月廿六日侯忌辰，有司具太牢祀之，廟宇因歲久傾圮，康熙二十三年，郡守祝鐘賢重修。	清康熙・祝鐘賢『靖州志』卷3
黎平府	飛山廟	楊再思	飛山廟，在府治東，五代梁時，靖州楊再思刺史誠州，死而有靈，土人祀之，宋封英惠公，廟旧在靖州飛山，洪武十九年，建于此。	明・李賢『明一統志』卷88
	飛山廟	楊再思	飛山廟，即英惠侯楊再思祠，在城西街，乾隆四十二年建祀。	清光緒・俞渭『黎平府志』卷2下
通道県	飛山廟	楊再思	飛山廟，城東祀宋威遠侯楊再思	清康熙・祝鐘賢『靖州志』卷3
	威遠侯祠 飛山廟	楊再思	威遠侯祠，城東，一名飛山廟。祀宋威遠侯楊再思，嘗有功於靖者，通邑自建祠后，旱潦疫癘，祈禱必應，故八景之一，曰“飛山庇雨”	清嘉慶・蔡象衡『通道県志・宮建志』
城歩県	飛山廟	楊令公	飛山廟，東関外，祀宋楊令公。	清康熙・梁碧海『宝慶府志』卷16
	飛山廟	楊再思	飛山廟，在城歩泉東，祀宋誠州刺史楊通宝之祖再思。	清嘉慶・穆彰阿『大清一統志』卷361
	飛山廟	楊再思	飛山廟，在城東門外，祀宋誠州刺史楊令公再思，又城西二十里大州有廟，最昭靈應。	清同治・盛鑑源『城歩県志』卷4
沅州府	飛山廟	楊再思	飛山廟，在城北，建廟年代不可考，祀唐楊再思。	清乾隆・瑋珠『沅州府志』卷19
	飛山廟	楊再思	飛山廟，在城北，建廟年代不可考，祀唐楊再思，詳見芷江，明万曆間，廟毀，移神像北関楼上，后複建於此。	清同治・張官五『沅州府志』卷18
新寧県	飛山廟	不明	飛山廟，在県西十五里，内祀上谷之神。	明万曆・潘文系『新寧県志』卷4
	飛山廟	不明	飛山廟，治西十五里。	清康熙・梁碧海『宝慶府志』卷16

所在地	呼称	神名	引文	出典
天柱県	飛山廟	不明	飛山廟，在城西門外，設自明初，后毀， 国朝順治十八年重建，各里崇祀不一。	清光緒・佚名『統修天柱県志』卷2 下
	飛山廟	楊業	飛山廟，在県東，祀宋楊業	清光緒・曾国荃『湖南通志』卷76 『典礼六』
麻陽県	飛山廟	不明	飛山廟	明・朱孟震『河上楮談』卷1
	飛山廟	不明	飛山廟，旧在城外北，頽壤，万曆年間， 遺像北閨楼上，后仍遷建城北。	清康熙・黃志璋『麻陽県志』卷3
	飛山廟	楊再思	飛山廟，在麻陽県城北，祀唐楊再思。	清嘉慶・穆彰阿『大清一統志』卷369
綏寧県	飛山廟	楊再思	飛山廟，西門外。	清康熙・祝鐘賢『靖州志』卷3
	飛山廟	楊再思	飛山廟，祀宋誠州刺史楊通宝之祖楊再 思，有功於郡，靖属通祀之，康熙十年 建，年久傾圮，嘉慶二年知県王玉輝重倡 建。	清同治・方伝質『綏寧県志』目錄
思州府	飛山廟	楊再思	飛山廟，在府城南一里，其神即唐誠州刺 史楊再思也，前代封英惠侯，血食此郡， 夷人有災，禱之屢応。	明弘治・潘穉『貴州図経新志』卷4
鎮遠府	飛山廟	不明	飛山廟，在平冒寨。	明嘉靖・謝東山『貴州通志』卷7
玉屏県	飛山廟	不明	飛山廟，在北門外，明建，乾隆十八年， 增修并建前殿。	清乾隆・趙沁『玉屏県志』卷3
秀山県	飛山廟	楊再思	飛山廟，在秀山県西，祀唐誠州刺史楊再 思，四洞長官之祖也，屢著靈異。	清嘉慶・穆彰阿『大清一統志』卷417
鳳凰庁	飛山廟	不明	(鳳凰庁) 飛山廟有二，一在南門外茶園 坡，嘉慶五年同知伝肅建，正殿三間，頭 門一間。一在大碼頭，系庁人公建。	清道光・黃心培『鳳凰庁志』卷4
貴陽府	飛山廟	楊再思	飛山廟，在貴陽府城内西隅，奉閔帝炎帝 馬王右。建乾隆中複修飛山廟，在府城 西，祀英惠侯楊再思。	清道光・蕭瑄『貴陽府志』卷41
思南府	飛山廟	不明	飛山廟，在焦溪，明為回龍寺，毀。乾隆 時，里人楊姓重建，更今名。	清道光・蕭瑄『思南府統志』卷3
松桃庁	飛山廟	威遠侯	飛山廟，在城南対岸，廟祀威遠侯，楊公 之神，謹考。	清道光・蕭瑄『松桃庁志』卷9
乾州庁	飛山廟	楊再思	飛山廟，在城西，祀宋楊再思。	清光緒・蔣琦溥『乾州庁志』卷3
会同県	飛山廟	楊再思	飛山廟，在口四里地湖，塑宋朝封威遠侯 楊將軍像。	清光緒・孫炳煜『会同県志』『重修会 同県志』卷13
江口県	飛山廟	不明	飛山廟	民国・佚名『江口県志略』卷3
淑浦県	飛山廟	不明	飛山廟，坎下田一坵，一畝五分。	民国・吳劍佩『淑浦県志』卷10

出典：廖玲の調査報告 [廖2014: 166-167] に基づき筆者作成。

盛の敵となり、「地方の英雄」として現れただけでなく、地方社会の調和と地元住民の平安の
守る神と見なされていることがわかる。



図1 明清時代の貴州と湖南の境界地帯における飛山廟の分布図 (表1に基づいて筆者作成)

また、清代中期、靖州で発見された統修「楊氏族譜」(1782年修纂)や、綏寧県東山横坡村の「楊氏族譜」、靖州県安村の「楊氏族譜」「楊氏宗譜」、湖南省会同県の「三公合譜」、貴州凱里の「楊再思氏族通志」、湖南省会同県沙溪郷の「楊氏族譜・威遠侯再思伝」など、楊氏の族譜が編纂されたことが報告されている [羅2014: 68, 2018: 51]。それらの族譜の内容からすると、靖州とその周辺の楊氏の人々は、楊再思の子孫を自称し、飛山公楊再思を一世代の祖先とする。また飛山公の息子である政約、政款、政聯、政岩、政嵩、政権、政欽は、それぞれ武功、羅蒙 (今通道県)、真良 (今綏寧県)、辰州府 (今阮陵県)、綏寧県東山、貴州湖耳 (今黎平県) などの地区に駐在していたため、現在、各地の楊氏の同姓集団は楊再思の息子たちの子孫であることが述べられている [羅2014: 68]。これらの内容は全て信じられるわけではないが、楊氏の人々が自分の系譜を地元の名士の楊再思に溯らせたことは、飛山廟の各地への展開と大きな関係がある。

系譜の編纂とともに、当時、靖州以外の多くの楊姓の居住地にも飛山廟が建てられた。例えば、湖北沙溪のような遠く離れている地域にも飛山廟があった [cf. 羅2016a: 30, 2016b: 61]。彼らの族譜によれば、彼らは楊再思の子孫であり、昔、江西から渠陽 (靖州) に移転し、現在の居住地に定住してきた。そのため、彼らは飛山廟を建てて、祖先楊再思を祭祀してきた。つまり、飛山廟は宗祠に相当する。また、広西三江県林溪高友村には呉氏の飛山廟がある。その『廟堂序』には、「蓋聞靖州之境有一飛山廟宇、廟中楊公即威遠侯王也、履頭聖于其地。楊公生為良將、歿為明神……呉家始祖之壇、清代乾隆年間由靖州經高団遷于斯。奉之則靈、民豊物

阜，五穀豊穰」とある。すなわち、清代乾隆年間、呉氏の祖先は靖州から転出し、通道県高団を経て、現在の高友村に移住してきた。その際、祖先は靖州の飛山神廟から飛山公を居住地に招来した〔羅2014: 71〕。このことから、移民と移住という背景は、飛山公の信仰が湖南・貴州・広西の各地に伝えられてきた重要な要素であることがわかった。

もう一つの原因は、飛山神が靈験を現し、人々を救けたという語りが広く伝播されたからである。具体的には、飛山神が、太平天国運動や、民国期の軍閥、抗日戦争などの戦禍や匪賊から地元の民衆を助け、加護してきたといった語りである。例えば、靖州飛山廟を管理している石昌梅などの長者たちは次のように語った：小さい時、母親は次のような話を教えてくれた。昔、広西の匪賊は靖州城を占拠しようとしていた。匪賊の首領は赤い帽子をかぶっており、非常に凶暴で、多くの人を殺した。この時、飛山爺爺の靈験が現れた。飛山爺爺は地元住民を加護するため、一方の足が靖州城のつり橋に立ち、もう一方の足は江公橋に立って、凶暴な広西の土匪の到来を阻止した。これらの土匪は戦わず自滅して、広西に撤退したため、靖州城の民衆は助かった〔羅2018: 49〕。そのため、靖州の住民（他の地域に移住した人々も含む）は今もまだ飛山公を地方の守護神として信仰している。

その他、病気の治療に関する民俗としての飛山信仰も伝承されている。例えば、凌・芮の『湘西苗族調査報告』は、各地の苗人の居住地には飛山神廟が建てられていると指摘し、その建築様式は土地廟と共通の様式をもっているとする。また報告書によると、旧暦の2月と8月の2日目には、地元住民は土地公を祀った後、飛山公を祀って加護を祈願する。その原因は、飛山公は恐ろしい神であり、人間に病をもたらすことができるからとされている〔凌・芮2003: 89-90, 113〕。湖北の土家族や貴州の一部の苗族などの少数民族でも飛山は病気と関わる「凶神」であり、トン族地区の楊氏が信奉する飛山公楊再思とは無関係であると信じている。また民国『三江県誌』（巻二 社会）には、飛山神は「侗人祀之、苗或参加、昔在侗苗郷村間、率建有宏大之廟宇、考其碑記、称唐時之征蛮者、然皆略而不詳」とある。三江県では林溪、冠洞、程陽、馬胖、七団などの村には、楊令公（楊再思）を祀る飛山廟が存在する。1949年以前には、七団、四歩一帯のトン族の人々は、旧暦の6月6日（伝承によると楊再思の誕生日とされる）には飛山廟の前で「拉牛上樹」の活動を行っていた。林溪、冠洞一帯のトン族は旧暦の10月26日（伝承によると楊再思の命日とされる）に林溪の飛山廟の前で「搶花炮」を行っていた〔石若屏1986: 58-59〕。ここから、飛山信仰には地域差が存在することがわかった。

4. 現在の傾向：2つのトン族村の事例

飛山公祭祀はかつて公的祭祀儀礼として取り入れられたが、各地の飛山廟（特に祖廟としたもの）は1950年代以降「破除迷信」と文化大革命などの政治運動によって大量に破壊された。だがここ30年、中国の西南地区で保存され、再建されてきた飛山廟は、新しい特徴を有して

いる。以下では、広西チワン族自治区三江県の2つのトン族集落の事例を挙げてみる。

(1) 飛山を一族の共通の祖先として祀る例

広西において、トン族の人々が暮らしている多くの村は、飛山を一族の共通の祖先として祀る。例えば、林溪郷の最東北限に位置する高秀村の場合、草分けの親族組織である楊氏と謝氏は飛山を一族の共通の祖先として祀る。楊氏は楊再思の末裔と自称し、家の堂屋に飛山の神棚を設置し、三代先霊とともに祀る（飛山は氏族の祖神に相当）。具体的には、表2の通り、神棚の中央には「祭勅封家奉飛山土主威遠侯王位牌」と書かれており、「本楊氏歴代門中宗祖三代先霊」とともに祀られている。一方、湖南靖州からきた謝氏も飛山を信奉しているが、彼らは飛山を家の神棚には設けず、「飛山土主威遠侯王」の位牌を置いていない。逆に、本貫地で祀る守護神としての飛山の加護を得るべく、廟を建てて祀ってきた。彼らの飛山廟は、集会所である鼓楼の隣に建てられている。彼らはその飛山廟を「フェイサンミュウ feil sanl miuv」と呼び、宗祠に相当するものと見なしている。廟の中には「本祭家奉飛山土主威遠侯王之位」という位牌²²⁾を安置している。そして、人生儀礼や祭日に際し、必ず供品を捧げるべきとされる（飛山は一種の産土神に相当）。

表2 飛山を祀る高秀村の楊氏・謝氏の家屋の神棚

	楊 a	楊 b	楊 c	謝
	清白堂	純其祖德		祖德流芳
神棚の文言	祭勅封家奉飛山土主威遠侯王 本音楊氏歴代門中宗親 右穆 玉盞長明萬盞燈	祭勅封家奉飛山土主威遠侯王位牌 左昭 玉盞長明萬盞燈	祭勅封家奉飛山土主威遠侯王之神位 金花小娘 楊氏門中宗祖三代先霊 銀花小妹 玉盞長明萬盞燈	金爐不断千年火 吾封上聖民主相公之神位 普同供養 天地國親師位 是吾宗支 本支謝氏堂上歴代祖宗三代先霊 玉盞長明萬盞燈
	本宅下壇 興隆土地 進寶郎君 瑞慶夫人 招財童子 之神位	本宅下壇 興隆土地 進寶郎君 瑞慶夫人 招財童子 之神位	本宅下壇 興隆土地 進寶郎君 瑞慶夫人 招財童子 之神位	本宅下壇 興隆土地 進寶郎君 瑞慶夫人 招財童子 之神位

そのため、高秀村の楊氏にとって、飛山公楊再思は氏族の祖先神（祖先とみなす神。系譜上の祖先ではない）であると考えられる。それとは異なり、謝氏の中には飛山を祖先神として祀る人も多いが、飛山は集団成員を守るための神であると考え人もいる。彼らが廟を建てて飛山を祀る理由について、謝氏の XYP 氏（男、1950 年生まれ）は次のように説明している。

昔我々の祖先は、商売や帰省の際によく湖南省の靖県に行っていた。ある日、帰る道中に強盗や匪賊に出会い、非常に危険な目にあった。その際、一人の仙人が祖先の前に現れた。彼は我々の祖先に助かるための方法を教えてくれた。仙人は、早くあの田の隣にある桶のなかに隠れれば、あなたは助かるだろうと言った。また、もしあなたが無事に家に帰ったら、一族の平安を守るために必ず廟を建てて、「飛山」をあなたの祖先として奉納するように、と言った。我々の祖先は助かり、家に戻ってから、仙人の指示に従って飛山廟を建て、祖先として信奉してきた。

一説には、祖先は靖県にいるとき知人にだまされ、木桶の中に入った後、知人は木棒で出口を封じた。彼はそこから出られなくなってしまった。そのとき仙人が現れ、彼を救ったため、彼は家に帰った後に廟を建て、以降その仙人を祀ってきたという。

つまり、謝氏が靖州県から移した飛山を家の神棚に設けないのは、飛山を実際の祖先としてはいないが、守護神としての飛山の加護を得るべく、飛山廟として祀ってきたからであることがわかる。また彼らは、村が大火災に遭遇した際に、一族の成員の居住区が罹災しなかったのは、飛山の加護を得たからであると語っている。彼らは、こうした靈験の現出のようなことを、「飛山は祖先である」、または類似するものとして信奉する重要な理由とみなす。そのため、彼らは、生命儀礼や慶事を行う際に、順番に従って、まず廟で飛山を祀り、そして家に戻って近年亡くなった祖先の霊を拝む。また、正月や他の年中行事に際しても、必ず飛山廟で祭祀を行うことが重視される。儀式を行う際、男性の家長や長男が廟へ行き、魚・ニワトリ・豚肉および果物などを飛山の位牌の前に捧げる。そのため、高秀村の謝氏たちにとって、飛山公は氏族の守護神、または氏族が本貫地で祀る神であり、現在では一種の産土神のようなものであると考えられる。

(2) 村全体の土地神とされる飛山

もう一つの事例は、広西三江県の独峒郷の独峒村というトン族の行政村の事例である。独峒村には独峒・盤貴・林略・岬団という 4 つの自然村があり、いずれも呉・楊・韋・石・于・陸・梁などの姓氏のトン族の人々が居住しており、村全体が共同で飛山廟を建てている（表 3 を参照）。また、村人の語りによると、それらの飛山廟はすべて各村の住民全員で共有するものである。それらの廟の祀神は、楊再思である場合と、楊家将という北宋の将軍または岳飛

表3 広西三江県独峒村における飛山廟の状況

飛山廟	神明	位牌	祭日	飛山の靈験を現れる村人の語り
独峒飛山宮 (村の東南部に位置し、由来不詳、1993年重修)	楊再思 (唐末宋初の民族英雄、十洞首領)	祖先の位牌、土地の神位とともに、飛山大王威遠侯之神位が置かれている。祈願のための木がある。不妊の夫婦は飛山大王に子宝を祈るために、廟門の前に二本の四角形の木杭がある。	旧暦1月1日、3月3日、6月6日、10月26日に大祭を行う	古代叙州には四大英雄がいた。そのうち、楊再思は北方を占拠して、潘大虎は東南を占拠していた。潘は洪水被害のため、飛山地区に移住し、飛山民衆を抑圧して、金銀を横奪した。その後朝廷の弾圧によって、民衆は戦争に苦しんだ。楊再思が住民を救出し、飛山地区の首領として担がれてきた。「楊太公救飛山」[張ほか2008: 297-298]という伝承の大意は靖州の伝承と類似する。)
盤貴飛山廟 (由来不詳、文革後に重建した臨時の廟)	楊再思 (唐末宋初のトン族英雄、十洞首領)	位牌と神像がないが、飛山大王の杖(茶樹の枝)がその代わりに置かれている。	旧暦12月30日、1月1日、1月15日、3月3日、清明節、6月6日に大祭を行う また、毎月1日・15日は簡単な祭祀儀礼を行う	飛山大王は、唐末五代期のトン族首領である。また、飛山大王は脚に障害のある年長者であり、トン族の人々は彼のために杖を用意した。飛山大王は大嵐など災害を避け、村人を守っていることがある。飛山大王は子供に対しては慈悲深くて優しいとよく言われている。村人の話によると、以前、ある子供が飛山おじちゃんの杖を借りて遊びに行ったことがあった。ある大人が見て、それを止めた。その後、大人が病気になった。その病気の原因は、鬼師によると、飛山大王が子供たちと楽しく遊んでいるところで、子供を追い出して、飛山大王を怒らせたのである。それ以降村人は子供たちを廟で自由に遊ばせた。
林略飛山廟 (村の東南部に位置する。)	岳飛(南宋の抗金名将)	岳飛(男神) 不妊の夫婦は飛山公に子宝を祈るために、廟の南面には7、8本の四角形の木杭を立てている。	旧暦1月1日に大祭を行う	村人は岳飛を飛山大王とし、しばしば靈験が現れた。例えば、①ある年、村のある家が火事を起こしたが、近くの木造の建物は焼かれていなかったため、村全体は火災を避けられた。ある村民が、白髭のおじさんが扇子で火を消しているのを目撃した(村人はそれが飛山王と関公と一緒に村人を助かったと信じた)。②林略寨の青年が隣村に「月也」に行く時、行列の前に白い服を着ているおじさんが白い馬に乗っているのを見た。
岷団飛山廟 (村の東北部に位置する。由来不詳、1985年重建)	楊六郎(北宋の名将)	楊六郎(男神)・趙德芳(男神)・余太君(男神)・穆桂英(女神)の4つの神像が置かれている。また、廟の中には子宝を祈るための小さな観音堂と穆桂英の神像が置かれている。不妊の夫婦は飛山公に子宝を祈るために、廟の向こうにある山の中には多数の四角形の木杭が立てられている。	旧暦1月1日、村の神々を祀る際に、必ず先に飛山大王を祀る	楊六郎は岷団寨の空で、美しい孟河江と山の風景をみた後、村人に夢を託して、ここに住み込み、村人を守るといった。そのため、村人は集金し廟を建てた。飛山大王はしばしば靈験を現したと言われる。例えば、①抗日戦争時期、日本兵は同寨から貴州方面に向かって村に近づいてきたが、飛山大王の霊が現れ、鬼子は驚いて逃げた。②1976年に村のある民家が火事を起こしたが、その近くに位置する風雨橋は無事だった。それは飛山大王が守ってくれたからであると村人は信じる[張ほか2008: 300-301]。

という南宋の名将である場合がある。同じく楊再思であっても、漢民族の官吏の前に靈驗を現したのもあれば、土地の守り神の性格を有するものもある。具体的には、独峒村と盤貴村の飛山廟の祀神はすべて楊再思であるが、前者は靖州の飛山に関する伝承を継承しており、後者はそれとは異なり、土地神の特徴を持っていることが判る。

また、林略と佘団の飛山廟で祀られている神は楊再思ではない。後者の場合、村人は、飛山大王は楊再思や楊氏の將軍とは思われず、岳飛という南宋の名将であると信じている。しかも、村人の語りによると、飛山大王の靈驗が現れたとき、「白い服を着ているおじいさんが白い馬に乗っている」という。この表現は、靖州の飛山楊再思の靈と類似している。言い換えれば、現在の飛山廟に関する信仰をみると、祖先神も土地神も地方の守護神も、地域ごとに様々な差異があり、地方住民の飛山に対する語りも様々な説があるため、飛山信仰をさらに深く理解するためには、その地域間の比較研究を行うことが必要であろう。

現在、飛山公の誕生日（旧暦6月6日）と命日（旧暦10月25日）には、広く周辺の地域から信徒たちが組織的に靖州飛山宮に集まり、各種の祭りや祭祀儀式を行い、飛山公の加護を祈願する。平日には、靈驗あらたかな「飛山爺爺」に子供の成長・大学入試の合格・病気の治癒・健康平安など、様々な祈願を行う。女性住民は、常に総廟に集まって懺悔歌を歌う。懺悔歌を歌うことによって平安を守り、災厄を払い、福寿を増やすことを祈願するためである。歌の内容は、「飛山爺爺」、「飛山宝懺」など、飛山公の事績を賛美する祭文と呪文である。飛山公は、「保境安民、解困救難」をしてくれるほか、学生は彼を「文曲星」とし、子供を産みたい女性は飛山を「送子観音」として、病患者は飛山を葉仙としている。現在みられる飛山信仰は多様性をもっている。「飛山公＝楊再思」という歴史人物の物語に比べれば、現在の飛山神は特定の地域（一地方、一村）、あるいは特定の集団（一氏族・一房族。必ずしも楊氏とは限らない）の守り神であり、楊再思や楊氏一族の歴史伝承とは関係がない。しかしながら、（どの少数民族でも）楊氏一族の祖先としての飛山公楊再思に関する伝承の構築は、これからも絶えることなく続けられていくものと考えられる。そして文革後の復興期、民間社会は地方政府の支持を得るため、正統的な「楊再思像」を構築するべく努力を続けている²³⁾。これらの原因により、現在中国西南部に見られる飛山信仰は様々な形態をもっているのである。

飛山を村の平安を守護する神明と見なすという特徴は、独峒とその周辺のトン族村においてしばしば見られる。独峒郷の最北限に位置する高定村では、村人はすべて呉氏であり、村の中東南に飛山廟を建て、全寨の守護神として飛山大王楊再思を祀っている。村民によると、飛山公は戦乱の時期に彼らの集落を守るために栄えた英雄であり、彼を記念するため、飛山廟を建てたという。毎年旧暦の1月1日と3月3日、村の全世帯は飛山廟に行き飛山公を拝み、命の恩義に感謝し、飛山公が村の平安を守ってくれることを祈願する。特に祭日、男性の年長者が飛山廟に集まって儀式を行う。彼らは、飛山公に新たな年の五穀豊穰、村寨の平安を祈願するだけでなく、村寨内部の各親族の和睦と団結の維持をも祈る。独峒村の付近に位置する雷

洞郷牙双村には、石・欧・呉などの非楊氏の人々が居住しているが、共に飛山廟を建てて祀っている。また2年に一度、旧暦1月8日に周辺の村に暮らしているトン族と共に大祭を行う。祭祀の際、同時に薩壇（女神の墓）と飛山廟に線香を上げ、供え物を捧げ、最後に飛山廟に集まって、女性が廟に入って神霊を賛美し、豊作を祈求し、平安を祈願する大歌を歌う。村民は、薩は祖母神であり、村人の暖衣飽食、人口の増加を守り、飛山公は村の平安と幸福を守護するため、両者は分業してトン族の人々を守ってきたと信じている。また村の歴史に精通するOSH氏（90代、トン族）によると、三省の境にある牙双村では昔から衝突が絶えないため、村人は平安を祈願すべく、飛山に対する信仰はいつそう強く切実であるという。

5. おわりに

本論文は、トン族・ミャオ族などの中国華南少数民族の住む村や町で広く祀られている飛山神という氏神信仰の歴史と現在をみてきた。以上述べてきたとおり、飛山公楊再思という歴史人物については不明な点が多いが、11世紀に、楊氏の首領が宋王朝に臣従し、冊封を受けた史実は確かである。そして12世紀から、湖南省の靖州地方には楊再思を記念・祭祀するため神廟が建てられ、その後、トン族居住地区を中心に華南地方の各地にも同じように飛山廟が建てられてきた。何世紀にもわたる長い間に、一般民衆から軍隊の将領まで、数多くの人々が地方神としての飛山公の庇護を祈願するようになった。一方、楊芳の説が歴史書に載せられたことによって、飛山公の地方の守護神としての役割が変わり、この地域の楊氏一族の祖先となってきた。その結果、明清時代から現在にかけて、各地に伝承されてきた飛山廟の特徴は、それぞれの地域社会と父系集団の実際の状況によって、きわめて異なる状況にある。たとえ同じく広西のトン族村であっても、飛山信仰には様々な実態がみられるのである。

それでは、飛山のような華南少数民族の民間神の祭祀形態をいかに考えればよいのであろうか。そこで、日本の氏神論を華南少数民族の飛山などの土地神信仰の分析にも応用してゆくことがその解決につながる可能性を考えてみたい。例えば、川田が示した二つのミンゾク学（民俗学と民族学）の方法論の近縁性〔川田2016〕は、フィールドにおける飛山神の複数の形態を解明するうえで重要である。歴史文献や民間文書に書かれた「飛山」という地方の保護神または楊氏の祖先神の成立とその地域差は、宋代以降の華南少数民族の地域社会において、現在トン族の最も大きな出自集団である楊氏一族の勢力の変化や地方官吏の活動、および明清時代の貴州と湖南の境界地帯における少数民族の移住と移動の歴史過程を表していると言えるだろう。しかし、それらの記述と現地調査の実態との間には、かなりの差異がみられた。トン族を含む西南各地の少数民族住民にとって、飛山の祀神は、楊再思という歴史人物だけでなく、楊家将や岳飛などその他の名将でなされている場合がある。そして、その神明の特徴は、唐末五代期の少数民族の首領であったり、脚に障害のある年長者であったり、子宝を祈るための土地

神であったり、災難をもたらす邪神であったりと、多岐にわたっている。それらの実態をそれぞれの地域的文脈において考察し比較する必要がある。

また、柳田が指摘した祭りの果たす役割、特に氏神の最も重要な特徴としての「祭を氏子たちの協同によって営むといふこと」[柳田1969(1947)]、および「祖先神から氏神への展開」[櫻井1993: 129-130]に関する研究は、飛山祭祀の組織と祭の日をそれぞれ有している、親族組織と村落組織の差異を理解するうえで有効であると考えられる。従来、飛山は漢文化がトン族などの少数民族社会に対して強い影響を与えてきたことの一側面であると論じられてきたが、広西北部のトン族村に見られるように、飛山を特定の地域単位の守護神と見なしている事例が多く、現在祀られている飛山の祖神としての特徴は、実は希薄化していることが判る。しかも、祖廟と見なされる場合も決して漢民族の祖先廟と同じものではない。したがって、飛山信仰を考える際には、各少数民族独自の親族の構造や概念、亡くなった先祖や祖霊が祖先神さらに地方の守護神へとなる（すなわち人間を神格化する）メカニズム、祖先と神に関する観念なども視野に入れながら、再検討する必要がある。

最後に、1980年代以降、広西・湖南を含む西南各地の住民は、文化大革命によって破壊された飛山廟・雷子廟・土地廟などの多様な土地の守護神の神殿の位牌を、臨時に設けられた神棚（土地廟の形）に置き祭祀してきたが、最近、一部の地域では、複数の神廟をひとつの飛山廟として再建しようとの動きもみられる。今後、華南少数民族の飛山廟と飛山信仰はどのような興味深い展開をとげていくか、さらに着目し考察する必要があるだろう。

【附記】本研究は、文部科学省の科学研究費補助金（若手研究 課題番号：20K13279）の助成を受けて行われている。本研究は、みんぱく共同研究「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」（代表者：片岡樹）の研究成果の一部である。また、本稿は、現代民俗学会2019年度年次大会（シンポジウム「民俗学のアジア、人類学の日本」）における口頭発表の内容に加筆・修正したものである。

注

- 1) そのため、飛山信仰は聖山信仰に基づいて、山岳信仰と英雄崇拜が結びついたものと考えられる人もいる [魏建中2017: 95, 98]。また、楊再思に関する歴史文献の記述は限られているが、確実なのは、彼が「飛山蛮」（現在の湖南靖州）においてトン族を代表するリーダーであったという点である [張雄1989: 157-185]。
- 2) 靖州地方の住民によると、唐末五代、華南少数民族「飛山蛮」の首領楊再思は、飛山を中心として広い地域に「文治武功、保境安民」という政策を行い、湘・黔・桂・渝・鄂の民族社会の調和と地元住民の平安を守り、境内の苗、侗、漢、瑶、土家などの各族の広範な尊崇を受けた。そのため、楊再思が亡くなった後、住民は彼を記念するため「飛山太公」と尊び、毎年、飛山廟にて祭祀儀礼を行い、「国泰民安、善隣友好」を祈願する。
- 3) http://hunan.ifeng.com/travel/mlhx/detail_2013_11/20/1487200_0.shtml (2019年5月19日確認)。2007年の同じ調査によると、飛山信仰に関する調査の結果、1949年以前、126県市内には181基の飛山廟があり、文化大革命の後、現存しているのは55基である。そのうち、貴州錦屏県には清乾隆34年（1769年）に建てられた飛山廟があり、現在は国家保護単位となっている。岑鞏県には8基あり、湖南通道は6基、広

西三江県には28基ある。

- 4) トン族地区において、飛山神信仰は主に貴州省の東南部、湖南省の西南部と広西の西北部の隣接地区に分布している。特に、湖南省の靖州、通道、会同、芷江、洪江、麻陽、武岡、綏寧、溆浦、城步などの10県、貴州省の黎平、錦屏、天柱、從江、榕江、玉屏などの6県、広西の三江、龍勝などの2県に分布している。これらの地域は主に古代のいわゆる「飛山蛮」という地域単位に属する。
- 5) 張雄は唐宋時代における中南地区の「溪州蛮」、「叙州蛮」、「飛山蛮」、「梅山蛮」などの少数民族の歴史を整理した〔張雄1989: 157-185〕。張の研究によると、その範囲は、現在の湖南省黔陽・会同・洪江・靖州・通道などの地域である。
- 6) 廖耀南は「資治通鑑」の記述「承磊族人楊再興以其地附於楚」を考証した結果、「楊再興」は実は「楊再思」であると指摘した〔廖1983: 108-112〕。
- 7) 中国の王朝によっておこなわれた周辺民族に対する統御政策の呼称である。
- 8) 地方文史の研究者は廟を建てて飛山公を祀る時期について考察したが、誤謬が多いようである。例えば、明・澤桂の「飛山廟」における飛山公の楊再思が亡くなった三年目にはすでに廟の祭りが始まっているという記述は正確ではない。
- 9) 考証によると、最初の飛山廟は靖州県飛山絶頂に建てられ、南宋淳熙11年(1185年)靖州知州孫顯祖は飛山廟を城西門外に移転した。明正統10年(1446年)、知州蘇恣は飛山廟を再建した。再建された飛山廟には3つの神殿があり、周囲に塀が築いてある。大門に入ると、戯楼と廊下がある。神殿では、①前殿、宋工部侍郎・靖州鶴山書院の創始者である魏濟翁と明靖州知州党哲の神位、②本堂、飛山太公楊再思の神像、③楊再思の父母の位牌を供える。
- 10) この石碑は靖州飛山宮に保存されているが、文字がはっきりしないため、不明な点が多い。碑文の内容は『光緒靖州直隸州志』(巻十一芸文・記・第5頁)の記載を参照。
- 11) 地方誌では2つの石碑はいずれも同じ場所に立てられていると記されているが、靖州飛山宮内にはこの碑がない。本碑文の引文は、清・光緒『靖州直隸州志』(巻十一芸文・記・第4頁)に収録されているものである。
- 12) 事実は、北宋の謝繇が飛山神祠に題記した時期から明代嘉靖16年(1537年)まで、300年以上の間、新の書院の左側に、現在の住所に残っている飛山宮が建てられたかかどうかかわからない。金章が靖州の鎮守を務めた時、神祠はすでに倒壊していた。正徳3年(1508年)、靖州參將黃焘はかつて「慨其朽壞、為増修之」、「神事跡無所於考」などの原因で、民間から手がかりと文字資料を探してきた。飛山神の靈驗伝説や「雖深山窮谷中、莫不有廟」という俗説などの口頭伝承と同じように、民間で見つかった謝繇の碑文は、神明の事跡と飛山公の故事を石碑の上に重刻し、飛山神祠に建てたという。
- 13) 明・万曆期、姚履泰が、靖州知州陸遠および会同・通道・天柱県の県令4人を連れて飛山を訪ねた後、書いた紀行文である。「遊飛山記」(清・康熙『靖州志』巻六・芸文収録)は、白雲洞天、玄天觀、淨樂宮、玄帝祠、雷神祠などの飛山の山頂に建てられた祠宇觀庵について述べているが、前述した謝氏の碑文が言及した飛山絶頂にある「正廟」や方広寺の付近に建てられた「行祠」については全然言及していない。
- 14) 明・正徳と嘉靖年間に2回、地方の官僚が損壊や傾倒を目撃し、または「神事跡無所於考」といった状況にあることが記されている。
- 15) 靖州一帯には呉天保というもう一つの大姓の首領がいた。元至正年間に溪洞の少数民族を率い蜂起した。また元末靖州丁伸仔が民衆を率いて飛山一帯を占拠し、官軍に対抗した。明・姚履泰の「遊飛山記」も「相伝五代時楊承磊旧砦、元末土人丁伸仔据之、為我兵破滅」(この地域は、五代に楊承磊の旧砦と伝えられているが、元末は土人丁伸仔の拠り所となり、わが軍士によって消滅した)(清・康熙『靖州志』巻六・芸文)。清・光緒の『靖州郷土志』では、清代中期、中央王朝の沅水上流地域に対する開発が次第に展開するに伴い、水路交通の便がある靖州は、地方貿易活動の中心となったため、靖州とその周辺地域は大きな発展を遂げた。そのため、楊氏のほか、呉氏・李氏・丁氏と靖州城付近の儲氏・姚氏などの大姓一族が現れ、商業貿易のために移住してきた人々も増えたため、靖州地区の住民は多様であることが記されている(同上巻二・氏族)。
- 16) 清代の地方志には、靖州渠水の東側にある渠陽廟と威遠侯廟、および新書院の付近の飛山廟について、

- 「歳時早涼及疫疔禱之輒応、每六月初六日侯生辰、十月廿六日侯忌辰、有司具太牢祀之。廟宇因歳久傾圮、康熙二十三年郡守祝鍾賢重修」とある（康熙『靖州志』卷三・廟壇）。
- 17) 明代後期から、地方官庁は飛山公をめぐる祭祀儀礼において、重要な役割を果たしていたようであった。明清交替の際や戦争が起こった際、靖州と飛山廟も相当な影響を受けていた。そのため、康熙23年(1684)に靖州飛山廟は倒れ、地方政府は改修を行った。清の『靖州直隶州志』の「威遠侯祠」には「自咸豊以来、屢著顯應、迭保危城。于同治七年經巡撫奏請、奉旨列入祀典、至今春秋二届及六月六日神誕、州牧咸致祭焉。」（光緒『靖州直隶州志』卷三、祭祀、3）。その時期から、歴史上の飛山神廟の命運が再び変わったのである。
- 18) 謝繇（靖州知州）は孫頌祖（知州）が飛山神祠を修築するために石碑の文章を創った（『靖州直隶州志』（卷七、秩官）の「重修飛山廟」を参照）。
- 19) 例えば、乾嘉苗民が蜂起したのは、乾隆6年（1741）でなく乾隆60年（1795）である。
- 20) 例えば、清・光緒『靖州直隶州志』（卷三・祠祀・冢墓）。
- 21) 楊昌太が述べたもので、林河が整理した「楊令公大破飛山寨」[靖州苗族侗族自治県民間文学三套集成辦公室1988: 20-22]の内容により整理。
- 22) その位牌は、左に「兩班文武」「神德恩扶祠旺」右に「十二朝官」「祖公福庇子孫賢」と書かれている。その下には「興隆土地」「進宝神君和招財童子」の神位を祀り、「保一方清泰、佑四季平安」という対聯がある。また神龕には、6つの香燭と燈油が供えられている。
- 23) 飛山宮の管理と廟会・祭祀の手配は、いずれも民間組織が担当する。現在、靖州飛山廟は「県級文化遺産保護単位」として登録されたため、地方政府も飛山宮の修理のための経費を支援している。それだけでなく、地方政府は飛山祭祀に関するイベントに出席したり参与したりしている。末端政府による観光開発は、飛山信仰の地方歴史文化資源としての価値を重視するためであり、現在、県内では「飛山広場」という広場と飛山公楊再思の彫像などを作り、飛山公がトン族の英雄人物であることを強調してきた。そして、県政協文史委員の努力によって、「飛山蛮民族文化百県調査」を始めた。湘・黔・桂・鄂・渝・滇・川などの7省126県（市、区）、飛山公楊再思をめぐる祭祀活動の状況、各地の楊再思に対する記録や関連する歴史的文物の状況などが調査の主要な内容となっている。

参考文献

- 柳田国男 1969 「先祖の話」『定本柳田国男集10』筑摩書房（1946年初版）。
- 1969 「氏神と氏子」『定本柳田国男集11』筑摩書房（1947年初版）。
- 櫻井徳太郎 1993 『神々のフィールドワーク』法蔵館。
- 新谷尚紀 2017 『氏神さまと鎮守さま：神社の民俗史』講談社選書メチエ。
- 福田アジオ 2016 『歴史と日本民俗学 課題と方法』吉川弘文館。
- 川田牧人 2016 「私は〇〇〇でミンゾク学をやっている」川田牧人編『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先：グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ』成城大学グローバル研究センター。
- （清・光緒）黄炳奕等纂『湖南直隸靖州志』卷三・祠祀・塚墓、卷十一・芸文。
- （清・康熙）祝鍾賢修『靖州志』卷三・廟壇、卷六・芸文。
- （清・光緒）金蓉鏡修『靖州郷土志』卷二・氏族（光緒三十四年刻本）。
- （民国）『銅仁府志』卷十一・列伝・武功・楊芳、中華書局、1992年点校本、230-233。
- 顧祖禹『讀史方輿紀要』卷八十二、湖広八、中華書局、2005年、第40頁。
- 凌純声・芮逸夫 2003 『湘西苗族調查報告』民族出版社。
- 廖耀南 1983 「楊再思の史実及其族別初探」『貴州民族研究』1: 108-112。
- 廖玲 2014 「明清以来武陵地区飛山廟与飛山神崇拜研究」『宗教学研究』4: 165-172。
- 羅兆均 2014 「神明「標準化」、"正統化" 下国家与地域社会之間的互動——基于湘黔桂界隣地区飛山公信仰研究」『雲南民族大学学报（哲学社会科学版）』31(6): 67-72。
- 2016a 「人群与神明：清水江下游地域社会的家族互動与信仰建構」『北方民族大学学报（哲学社会科学版）』

- 学版)』2: 28-32.
- 2016b 「家神の較量：湘黔桂界隣地域社会的家族互動与信仰建構」『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』43(2): 57-65.
- 2018 「多重叙事下的侗苗族群歴史記憶与地方社会——基于湘黔桂界隣地区飛山神楊再思伝説研究」『雲南民族大学学报（哲学社会科学版）』35(2): 47-52.
- 靖州苗族侗族自治县民間文学三套集成辦公室編 1988 『中国民間故事集成湖南卷・靖州資料本』内部刊印本.
- 三江侗族自治县志編纂委員会編 1992 『三江侗族自治县志』中央民族学院出版社.
- 石若屏 1986 「“飛山蛮” 浅談」『广西民族研究』3: 57-61.
- 石啓貴 1986 『湘西苗族实地調查報告』湖南人民出版社.
- 田仁利(編) 2015 『湘西土家族苗族自治州金石通纂』湖南人民出版社166, 203-204.
- 魏建中 2017 「神山与山神——飛山神信仰探微」『民族論壇』2017(2): 95-98.
- 謝国先 2009 「試論楊再思其人及其信仰的形成」『民族研究』2: 77-85.
- 『楊再思氏族通志』編写組編 2002 『楊再思氏族通志』第二章 再思本紀 31-41.
- 張雄 1989 『中国中南民族史』广西人民出版社.
- 張応強 2010 「湘黔界隣地区飛山公信仰の形成与流播」『思想戦線』36(6): 117-121.
- 張沢忠・吳鵬毅・胡宝華 2008 『変遷与再地方化——广西三江侗族“团寨”文化模式解析』民族出版社.
- Paul R. Katz. 2021. *Ethnicity, and Gender in Western Hunan during the Modern Era: The Dao among the Miao?* New York: Routledge.
- Zhang, Yingqiang. 2013. The Venerable Flying Mountain: Patron Deity on the Border of Hunan and Guizhou. Faure, David, and Ho, Ts'ui-p'ing. *Chieftains into Ancestors: Imperial Expansion and Indigenous Society in Southwest China*, pp. 66-85. Vancouver: University of British Columbia Press.

キーワード：土地神、中国華南、飛山信仰、氏神

Abstract

A reexamination of the worship of Feishan (Ancestral Spirits) in Southern China:
With reference to the theory of Ujigami in Japan

Jie Huang

“Feishan,” a Chinese folk guardian god, is widely worshiped in some parts of Southern China. Previous historical studies have considered the Feishan faith to be the ancestral god of the Yang surname group (or the Yang lineage) and mainly related to the historical Han Chinese figure known as “Yang Zaisi,” who was said to be the famous local leader of Jingzhou in the Qushui River basin during the Tang and Song dynasties. However, a field investigation conducted in the Guangxi and Hunan province borderlands found that Feishan believers are not limited to the Yang surname group as other surname groups also worship Feishan and have built temples of sacrifice to him. Further, not all worshippers believe that there is an inevitable relationship between Feishan and Yang-Zaisi. Because of the syncretism with local folk beliefs, in most cases, it has been difficult to clarify the kinds of gods enshrined in each specific Feishan temple as they are seen as ancestral gods, guardian gods, or gods of the land. This situation is similar to the worship by surname groups of Ujigami, the Japanese tutelary (or guardian god), which was gradually syncretized with other folk beliefs and has undergone significant changes since the Middle Ages. Therefore, this study attempted to re-examine the worship of Feishan in Southern China from a new perspective using case studies in several Dong villages.

Keywords: Chinese guardian god, Southern China, worship of Feishan, Japanese tutelary deity (Ujigami)